ジェンダー史

新体系日本史 9

大口勇次郎・成田龍一・服藤早苗 編

ジェンダー史

新体系日本史 9

大口勇次郎・成田龍一・服藤早苗 編

山川出版社

新体系日本史9　ジェンダー史

2014年7月10日　第1版第1刷印刷　　2014年7月20日　第1版第1刷発行

編　者　大口勇次郎・成田龍一・服藤早苗
発行者　野澤伸平
発行所　株式会社　山川出版社
〒101-0047　東京都千代田区内神田1-13-13
電話　03(3293)8131(営業)　03(3293)8135(編集)
http://www.yamakawa.co.jp/
振替　00120-9-43993
印刷所　図書印刷株式会社
製本所　株式会社　ブロケード
装　幀　菊地信義

©Yujiro Oguchi, Ryuichi Narita, Sanae Fukuto 2014
Printed in Japan　ISBN 978-4-634-53090-4
・造本には十分注意しておりますが，万一，落丁・乱丁本などがございましたら，
小社営業部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
・定価はカバーに表示してあります。

ジェンダー史総論

ジェンダー史の対象

かつて女性史が扱っていた対象を、広く社会的・文化的に形成された性別であるジェンダーの視点からとらえなおすとともに、あらたな対象を設定し探ったのが本書である。ジェンダーは社会的・文化的な意味合いにより性をとらえる見方であり、ジェンダー史はそのあり方の歴史を探ってゆくことになる。どちらかというと、女性に限ってその存在形態を探ってきた女性史に対し、ジェンダー史の対象は大きく広がりがある。

かつて女性史の研究は、女性研究者がもっぱら行うマイナーな研究とみられてきた感があった。ある会合で、出版されたばかりの日本通史の本の合評会が行われ、そこで司会をつとめた際に、参加者に今度の企画には女性史がまったくないが、どう思うか、と問うたところ、民衆には女性も男性も関係はありません、と一蹴されてしまったことがある。

しかし、それから約一〇年後の同様な企画においては、女性史は大きな柱とされるようになり、その間に女性史研究が認知され、重要性を増してきたものとなってきたことがわかる。やがて女性史はジェンダー史へとそのスタンスを広げ、扱う対象も広がり、方法論も深まってきた。「女性」に限らず「男性」へと、異性のみならず同性へと、さらに性差にかかわるあらゆる事象が対象とされるようになった。

かつての女性史には、女性の存在形態を探って明らかにすることにより、そのしいたげられてきた状態からの解

放をめざしてきた面がすこぶる大きかったのだが、ジェンダー史はそれを超えて社会の総体を対象とし、ジェンダー視点からの解明を試みる。ジェンダーという概念が登場したとき、女性史の研究者は、そのような視点はすでにこれまでの女性史が求めてきたものであり、それを担ってきたのであるからと、女性史からジェンダー史へとスタンスを容易に変えてきた側面がある。

これは日本の前近代の女性史研究者に多くうかがえることだったが、近代の研究者にあっては、ジェンダーの視点は社会運動と深くかかわっていたこともあって、そう単純ではなかった。というのも、ジェンダーの概念は近代社会を分析するうえでの要請として登場してきた側面があるからである。

ジェンダー史の特質

ジェンダーの仕組みを概括するならば、性差が立ちあらわれるのは、まずは分業においてであった。経済的分業が成立すると、それを軸に社会的分業が生じ、そうした諸分業にともなって政治的システムが整えられるようになり、さらには文化的な要素が付随してくる。こうしたジェンダー構造が、さらに外部との交流の影響を受けつつ、強化・変容をとげてゆく。

ジェンダー史とは、そのジェンダーの構造と再生産のあり方を探るとともに、出生に始まる人間のライフサイクルが重要なテーマとなる。幼児期のすごし方、成人の儀式、学習と教育、出会いと婚姻、出産、子育て、養育、壮年期のすごし方、病気・事故、看護と介護、老年期のすごし方、死の迎え方など、扱う対象はまことに広い。

一方、ジェンダーは自覚化されていない意識をも対象とし、気づかぬうちに人を差別する無意識の構造を抉りだしてゆく。そこから生まれてくる先鋭的分析は魅力に富むことになる。したがって歴史学の基本とされる史料についても、ジェンダーの分析はおよぶ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

漢字で書かれた史料ならば、その漢字を使用する人間のジェンダー性とともに、漢字の背景をなす大陸文化のジェンダー性を明らかにしてゆくことがもとめられ、さらには漢字を変形して仮名がつくられたことによる性格をも問う必要がでてくる。

紀貫之の『土佐日記』は「をとこすなる日記といふものを、をんなしてみんとてするなり」と始まって、ジェンダーの境界を超える試みから仮名の日記を書いたが、そこから仮名の文学が広く女性たちに広がってゆくことになり、あらたな文化的世界が展開していったことを考えると、ジェンダー史の有効性は明白である。

つまり史料に書かれた内容を読みとるだけでなく、使用された文字についても考え、さらに文字が書かれた紙のあり方まで探ってゆく必要があろう。また、文字にそえて描かれた絵画ともなれば、絵そのものの分析をはじめとして、依頼主や、絵を描く絵師、絵をみる鑑賞者の三者のジェンダー性を探ってゆくことになる。

それらがうまくつながってくると明解な解釈がだされ、説得力が生まれるが、ただ事はそう簡単ではない。

ジェンダー史がかかえている問題

ジェンダーを強調してゆくと、価値判断があらかじめはいりこんでの分析になってしまいがちであり、すべてをジェンダーで説明しようとする傾向が生まれるというあやうさもある。方法論には絶対はないのであって、いわばこうしたジェンダー決定論に陥らないように心がけながら、分析を進めてゆく必要がある。

分析する研究者におけるジェンダーという問題も存在する。これまで女性史については女性研究者が多く担ってきたことの延長上から、ジェンダー史も多く女性研究者が担ってきている。そこに性別分担が生まれてきているのも一つの課題である。

もっとも大きな課題は、ジェンダー史が古代から現代にいたるまでの通史としてきちんとこれまで語られてこな

かった点である。そのためにはジェンダー史独自の視点から時期区分を探ってゆく必要があるが、残念ながらそこまではいたっていない。ジェンダー史は歴史総体を対象とするのであるから、その視点が成熟していない段階においては、日本のジェンダーの歴史を探ってゆく場合、他の分野と同様に、古代・中世・近世・近代の時期区分を採用せざるをえない状況にある。

本書はこうしたむずかしい問題に直面しているなかで、果敢に日本のジェンダーの歴史に挑んだもので、女性研究者六人、男性研究者三人の手になる。時期区分はやむなく古代・中世・近世・近代の時期区分によりながら叙述してゆくことになった。本書を梃子にして、さらにあらたなジェンダー史が登場することを期待して、次に本書の概要を示しておこう。

古代のジェンダー

最初の古代は、原始社会から律令国家が確立するまでの時期を扱うが、なんといってもここで大きなテーマとなるのは古代国家との関わりである。

1章の「原始社会とジェンダー」では、農耕社会が生まれて階級が形成され、やがて王権が誕生し、中央集権的な律令国家が成立してくる、こうした道筋をジェンダーの視点から読み解いてゆく。

出土した遺物や遺構から男女の分業や家族のあり方を探り、ついで農耕がもたらした階級社会の成立についてふれてゆく。そうしたなかで邪馬台国の卑弥呼のような女性支配者も登場することになったので、その性格に迫ってゆく。成立した行政組織における性差や、墳墓にみられる被葬者の性格、さらに氏族の親族構造などについても考察を加えてゆく。

2章では「律令制国家とジェンダー」を扱う。六世紀末から古代国家として成立した倭国は、東アジア情勢のな

かで中央集権化を求め、ついに大陸から律令制を導入し、律令国家を確立させたが、そこでのジェンダーのあり方を考える。

焦点となるのが女帝論である。推古女帝に始まって、つぎつぎに女帝が登場する意味を探って、女帝中継ぎ論を否定し、その存在意義に迫るとともに、律令国家の運営における女性政治家の役割について考える。律令には大陸のジェンダー構造が、従来の氏族制のジェンダーのなかへと持ち込まれていて、そうしたあり方を親族構造や婚姻をはじめ、律令の規定とその解釈、戸籍の分析、『万葉集』の歌などから探ってゆき、さらには生活とライフサイクル、文化の諸領域にまで目を広げてゆく。

中世のジェンダー

中世については、ジェンダーの視点からすれば、家社会の成立が重要なテーマとなることから、その展開のなかでとらえてゆく。古代の氏族制の系譜、律令制の家制度を直接の前提として、その展開の上に、家社会が上は天皇から下は庶民にまで成立してくるのだが、その様相を探ることになる。

1章の「『家』の成立とジェンダー」では、天皇と貴族における父系優位の動きから家が成立してくる様相を探るなか、在地社会のなかでも家の萌芽がうかがえることを指摘し、婚姻や財産相続のあり方から家父長制家族が確立したとみて、その家におけるジェンダー構造に迫ってゆく。

続いて中世の政治的展開のなかでの、摂関期の国母と女房の存在、院政期の女院と乳母の役割、鎌倉幕府における女性の存在形態などを、男性の動きとともにみてゆく。

中世になると説話集や絵巻などジェンダーを探る史料が増加するだけに、ライフサイクルにおけるジェンダーが詳しくうかがえるところとなり、誕生、童、性愛、買売春、遊女、老いなどについて多岐にわたって扱い、さらに

穢れや救い、文学作品などから社会・宗教・文化の領域に分析はおよぶ。

2章の「『家』社会の確立とジェンダー」は、おもに十四世紀から以降の中世後期におけるジェンダーを考察する。まず各階層における婚姻と居住形態を明らかにしつつ、家のなかでのジェンダーを探り、相続制度が変質するなかで、家が確立することを指摘し、そこでのジェンダー構造を明示する。

続いて政治権力におけるジェンダーについて、朝廷や幕府における女性の動き、女院や皇女、女房、御台所、後家などのあり方と動きを考え、ライフサイクルについては、とくに子どもの養育と教育、男色などの性愛、老人の扱いなど、多数の史料から探ってゆき、最後に中世後期にさまざまに描かれる職人の動きと、中世社会を特色づける宗教に着目して、ジェンダーについて分析を進めてゆく。

中世末期の戦国時代については、今回のジェンダー史では専論を設けなかった。町や村を基盤として地域国家として成長をとげてきた戦国大名をめぐるジェンダーについては、多くの興味深い点が考えられるのだが、その点は今後の課題としよう。ただその戦国大名を継承した近世大名については、近世のジェンダーで検討している。

近世のジェンダー

統一政権の成立から幕末までの近世については、「近世社会のジェンダー」が扱う。近世社会には際立った女性の活躍を目にすることは少ないが、それは武家政権の強力な支配とも関係しており、ジェンダーの視点からの分析はきわめて意味がある。

そこで1章では「近世のジェンダー」と題して、近世社会の構造とジェンダーのあり方を総合的にとらえる。近世社会では武士と庶民の身分の別が厳しかったことから、おもに武家と庶民にかかわるジェンダーを扱い、幕末期になるとそのジェンダー構造に大きな変化が生まれてくることから、その点に注目して幕末のジェンダーをとくに

扱うことを述べ、本書で詳しく扱うことのできない農民家族のジェンダーに若干ふれる。

2章では「武家のジェンダー」と題して、最初に統一政権としての織豊政権期におけるジェンダーを考える。女性の財産や相続について男性との対比でとらえ、家の支配のなかでの役割や、戦時体制において女性がどう行動していたのかを考察する。続いて、幕藩体制が成立して以後の大名家と幕府における女性の役割、とりわけ「奥」に編制された女性の位置づけを探る。

他方で、政権を奪われた朝廷において、女性がどう行動していたのかを探ってゆく。将軍家と天皇家との婚姻の問題から、久しぶりに誕生した女帝の明正天皇の即位を考え、さらに皇后や女院、女官のあり方に言及する。また、武家の女性の分析を踏まえて武家における婚姻や相続にかかわるジェンダーをまとめるとともに、ライフサイクルについては、生育儀礼や教育、主婦役割などについて詳しくみてゆく。

3章の「近世庶民のジェンダー」は、多くの出版された書物を通じて、庶民のジェンダーを探ってゆく。仮名草子から女性に求められた家の「内治」の実際を探り、教訓書からは、女性の教育と文字文化との関わりをみつめ、『立身大福帳』からは、家の成立と女性の役割にふれる。

次に近世社会に生まれた都市の遊廓を取り上げ、『あつま物語』や『難波物語』から、遊廓にかよう遊客についてみるとともに、客を迎える遊女の心性を探り、近世初期から中期にかけての変化の様相をとらえる。

都市のジェンダーでは、江戸・京都の三井家や武蔵川越の塩商人の家などの具体例を紹介しながら分析し、近世中期における女性の動きを、労働や相続の観点から探る。さらに近世後期になってからの女性の変化にふれるが、そこでは只野真葛を例に取り上げ、社会にでて働く女性が増加してゆく動きを具体的に考える。

4章の「幕末のジェンダー」は、近世後期の女性の動きのなかにあって、商品経済の発展にともなう身分的秩序がくずれてゆくことなどから、ジェンダー史はあらたな段階にはいったとして、その様相を探る。最初に東海道に

沿う武蔵の生麦村の関口家の事例を紹介し、続いて幕末に起きた社会現象のお蔭参りやお蔭踊り、幕末維新期における政治運動などにみえる、女性の役割と位置を考え、最後に開港とともに生まれた国際結婚などにも言及して、近世の叙述をおえる。

近代のジェンダー

明治維新をへて近代になると、日本は国民国家の形成に向かったところから、ジェンダー史もこの国民国家や「国民化」の動きを中心に探ることになる。

1章では「国民化とジェンダー」と題し、最初に文明開化という時代において、近代世界を理想とする異文化受容を「国民化」としてとらえ、探ってゆく。なかでも国民化と身体との関わりに注目し、女性の身体描写、断髪、洋装の導入、性病の検査など、国家による身体管理の問題を取り上げて考え、家族や子どものあり方、生業を求める女性たちの動きにまで迫る。

続いて家族のなかの女性をめぐる意識や制度を考えるなか、自由民権期に自己主張をした福田英子や岸田俊子らの主張に目を向け、続いて景山英子や津田梅子らの動きを通じて、学問を受容することの意味を考える。また女が描かれる一方で、女が書くようになるが、さらに「良妻賢母」が求められる状況における女性をめぐる動きを探る。

民法や憲法が制定され、天皇一家の夫婦モデルが生まれるなど、広く政治領域でのジェンダー化が進行してゆき、「家庭」という語がつくられたように、女性にはこの家庭における位置を主婦像や婦徳などによってさまざまに求められ、女子の中等教育もそれに対応していった様相を探ってゆく。

十九世紀末から女性たちは生業に広く従事するようになったが、その様相を各種の調査や『職工事情』から読

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

み取り、村の女児の学ぶ意味をとらえる。二十世紀になると日清・日露の二つの戦争を契機として、性の管理や戦争未亡人、女性の風俗などの戦争における性の問題などが起きたことから、それらについて考え、「日本の女」をめぐる揺らぎに触れ、文明の視線の乱反射的構図を探る。

2章は「総力戦とジェンダー」と題して、女性運動に始まって、大衆社会の成立をへてやがて総力戦が開始された状況下でのジェンダーについて考察を加える。

男性／女性を把握し、その関係性を生み出す力学をジェンダー史の課題にすえ、二十世紀の日本に登場した「新しい女」たちの運動を取り上げる。良妻賢母という女性たちに対する要求への異議申立てに始まるこの運動を、平塚らいてうらの青鞜社を中心にして扱い、主体としての女性の主張、女性主義と女権主義への立脚、労働運動との関わり、近代家族や性の問題の扱いなどをめぐって考察を進める。

続いて社会が大衆社会に向かうなかで、ジェンダーがどのようになっていったのかを問う。消費社会が展開するなかで、男性には生産が割りあてられ、女性は消費をもっぱらにするものとされ、モダンガールことモガが登場するが、そうした動きをとらえるとともに、性の領域の拡大と揺らぎが始まることや、植民地での女性というあらたな問題が生まれることについて考察を進める。

さらに満州事変に始まる総力戦において、戦争がジェンダーに果たした決定的な影響について考察を進めてゆく。戦時動員と翼賛への参加に組み込まれるなか、家庭を基盤にして妻・母の役割を前面に掲げた女性たちの運動を軸にしてゆく。女らしさや母性の動員が求められ、戦時の性暴力の問題も生まれるなか、男らしさの男性性が積極的に打ち出されていった状況を探る。

そして最後に、敗戦と占領という状況下において、戦時動員に組み込まれていた女性たちがいかに行動していったのか、女性の解放を求める運動、民主主義のなかでの女性たちの動き、混血児問題など、多難な時代における女

性たちの活動をみてゆく。

そして現代へ

3章は「消費社会とジェンダー」と題して、戦後の消費社会のなかでの近代家族像とその揺らぎを契機とした、多くの女性運動や女性の主張、女性をめぐる社会状況などを社会学の視点から考察してゆく。

社会学的な視点として、近代の変容、女性の主体性、差別の二重化という現象に焦点をあわせてゆくことを提示して、まず一九五五（昭和三十）年から六〇年代にかけての、日本型家族の成立にかかわる問題を取り上げる。主婦の大衆化や主婦論争に認められる主婦とはなにか、そして恋愛や結婚などにみられる性のダブルスタンダードについて考察してゆく。

続いて一九七〇年代から八〇年代にかけての「近代的なもの」の揺らぎの時代を考える。女性の時代と称される現象、ウーマンリブ運動や男女雇用機会均等法の成立にともなうキャリア・ウーマンや三高（さんこう）ブームにみられる女性たちの葛藤（かっとう）を描き、「女性の時代」と称された空虚さをつく。

最後に一九八八（昭和六十三）年以降の「現代的なもの」があらわれ、いかに進行しているのかを、フェミニズムの困難さに直面している現実との関わりのなかで探ってゆく。

ここまで概観してきてふと気がついたのが、最近になってジェンダーという言葉をあまりみかけなくなっていることである。ジェンダーはもう卒業といった見方や、ジェンダーフリーへの時代になった、といった見方があるとしたら、実はそれは歴史の恐ろしさを知らないのである、といってもよかろう。意識しないなかでの桎梏（しっこく）となっているのがジェンダーだからである。

（五味文彦）

ジェンダー史　目次

ジェンダー史総論——五味文彦 i

I 古代国家の形成とジェンダー 3

1章 原始社会とジェンダー——西野悠紀子 5
1—農耕社会以前 5
縄文時代以前の社会／縄文時代の社会
2—農耕社会の成立 8
農耕社会の成立と国家の萌芽／階級社会の形成と女性の地位／政治とジェンダー／親族構造と婚姻／大陸文化の伝来と労働

2章 律令制国家とジェンダー——西野悠紀子 21
1—王権と政治 21
近代歴史学と女帝論／推古の時代／律令国家の成立と王権／八世紀の王権とジェンダー／八世紀の皇后／王権の変化／律令統治機構と性差
2—親族構造と婚姻 37
編戸制と婚姻・相続法／八・九世紀の親族と婚姻実態
3—生活と社会 42
生活とライフサイクル／経済と労働／宗教・思想・文化

II 「家」社会とジェンダー 55

1章 「家」の成立とジェンダー——服藤早苗 57
1—中世前期の家とジェンダー 57

家の萌芽／天皇と家／上層貴族層の一門と一家・家／在地社会の「家」の萌芽／嫁取婚と婿取婚—天皇と貴族／平安時代の財産相続／家格の成立と展開—父系的父権の確立／夫方居住婚の成立過程／嫡子優先と女子一期相続／家＝家父長制家族の確立／家内のジェンダー構造

2—政治権力とジェンダー　73

女帝から国母へ—国母＝母后の後見力／朝廷内の女房たち／院政期～鎌倉時代—女院の時代／院政期以降の朝廷の官人と女房／幕府の将軍と北条政子／幕府と御家人・女性／村落共同体とジェンダー—村の祭祀と宮座

3—ライフサイクルとジェンダー　85

誕生とジェンダー／童のジェンダー／成人式のジェンダー／性愛とジェンダー—閉ざされる妻の性・男色／買売春の成立と展開／好色の家—傾城の登場／老いのジェンダー—鬼婆の成立／寿命と出家／老人扶養

4—社会・宗教・文化のジェンダー　97

商人の家と分担／借上の夫と妻／触穢の成立とジェンダー／女性穢れ観のジェンダー／平安文学とジェンダー／文芸とジェンダー／男女の芸能

2章　「家」社会の確立とジェンダー——高橋秀樹　113

1—中世後期の家とジェンダー　113

婚姻と居住形態／家内のジェンダー／相続制の変質／家の確立とジェンダー／家と社会

2—政治権力とジェンダー　127

王権のジェンダー／近臣と女房／室町殿と御台所／大名家の後家

3—ライフサイクルとジェンダー　137

子どものジェンダー／性愛をめぐるジェンダー／老いの諸相

4—社会・宗教・文化とジェンダー 150
生産流通のジェンダー／中世宗教のジェンダー／男の文化と女の文化

Ⅲ 近世社会のジェンダー 165

1章 近世のジェンダー ——— 大口 勇次郎 167
1—近世編の構成 167
近世女性の地位／武家のジェンダーと庶民のジェンダー
2—農民のジェンダー 170
農作業の性別役割分担／小農経営のジェンダー論争／［コラム］農村女性のジェンダー論

2章 武家のジェンダー ——— 柳谷 慶子 176
1—織豊政権の成立と女性 176
近世武家女性の地位／女性の財産／家の相続と女性／戦時体制と女性の役割
2—幕藩体制の成立とジェンダー 183
将軍と大名の家督／性別空間としての「表」と「奥」／正室と奥向の公的役割／主従制と正室／女性家臣団としての奥女中
3—朝廷の女性 194
将軍家と天皇家の婚姻／女帝の即位／皇后と女院／女官の職務
4—婚姻および相続とジェンダー 199
縁組の戦略性／側妾制度／女性への財産譲与／女性による家相続／［コラム］家譜の表記とジェンダー
5—ライフサイクルとジェンダー 208

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com